

研究授業「保育内容—人間関係Ⅱ」についての省察

向 居 暁*

Reflection on an open class “Contents of child care and education: Human Relations II”

Akira Mukai

要約

本稿は、2014年6月24日に高松大学発達科学部において筆者によって実施された研究授業「保育内容—人間関係Ⅱ」についての振り返りの報告である。本時の主題は「昼間保育の効果」であった。授業資料はMicrosoft PowerPointを使用して提示された。また、本授業の改善点、および、授業改善一般についての議論が、学部教員によってなされた。

キーワード：公開授業、保育内容—人間関係、Faculty Development (FD)

(Abstract)

This paper reports an open class of “Contents of child care and education: Human Relations II” conducted by the author in the Faculty of Human Development, Takamatsu University on June 24th, 2014. The main topic of the lecture was “Effects of day-care (child care) on young children”. Microsoft PowerPoint was used for presenting study materials. How to improve the lecture and classroom teaching in general was discussed by faculty members.

Key words : open class, Contents of child care and education: Human Relations, Faculty Development (FD)

* 提出年月日2014年11月28日、高松大学発達科学部准教授

1. はじめに

高松大学、および、高松短期大学ではFaculty Development（以下、FD）として研究授業を定期的に実施している。このことにより、授業における大学教員の能力向上が期待されている。また、本学の研究授業は、学部学科以外の所属教員も見学可能である「公開授業」でもあり、それぞれの学科でセメスターごとに必ず1度は実施されている。発達科学部子ども発達学科においては、基本的に所属している専任教員の持ち回りで研究授業の担当が決定されており、著者が前回担当したのは、2006年度後期であった（向居，2007参照）。田口・藤田・神藤・溝上（2003）の公開授業の分類に従うと、本学の研究授業は「啓発型」（「公開授業」というイベントを実施することで、学内のFDへの意識を高めることが目的）、「モデル伝達型」（モデルとなる授業を公開することで、「良い授業」や「授業技術」を学び取ることが目的）、「反省（リフレクション）型」（自分の授業に何らかの問題を感じ、それを自ら改善するために他人の意見を聞き、どこに問題があるのかをツール等を用いてクリアにし、改善の糸口を探す）のそれぞれの機能が混在したものと考えられる。

本稿は、高松大学発達科学部子ども発達学科で行われた「保育内容—人間関係Ⅱ」の研究授業の記録と研究授業実施者（以下、実施者）による省察である。

2. 研究授業の実施

研究授業、および、検討会は次の日程で行われた。

（1）研究授業

日時：2014年6月24日（火）2校時

場所：本306講義室

科目：保育内容—人間関係Ⅱ（演習、1単位）

対象：子ども発達学科3年生（33名）、4年生以上（6名）

担当：向居 暁（実施者）

（2）検討会

日時：2014年6月24日（火）5校時

場所：2217演習室

3. 「保育内容—人間関係Ⅱ」の紹介と教育目標

「保育内容 人間関係」は、幼稚園教育要領、および、保育所保育指針における領域「人間関係」、すなわち、子どもたちが「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力」をどのように育てていくのかについて学ぶ授業である（田代，2009）。

「保育内容—人間関係Ⅱ」（以下、本授業）では、2年生の後期（第4セメスター）に開講された「保育内容—人間関係Ⅰ」に引き続いて、受講生が領域「人間関係」に関する基礎的な事項を習得すると同時に、将来的に保育士や幼稚園教諭になったときのことを考慮し、実践教育を意識することができるよう心がけて授業を行っている。そのため、本授業では、実施者が授業内容をテキストと資料を用いて説明するだけでなく、授業内容に沿った課題を受講生に課し、受講生自身の意見を発表しあい、そして、お互いの意見を聞くことで授業が進行する場面を設けられている。実施者は、発表者の意見をまとめ、そして、もし既出の意見と異なる点や研究知見と矛盾する点など指摘すべき事柄があればそれを指摘し、課題の再考や意見の再提出を求めるなど、積極的に受講生の課題への自己省察を求める。したがって、本授業は討議法のような教授法的側面を持ち合わせているといえる。「学生たちは自ら考える前に、さまざまな問いに対する「正解」や「模範解答」を教員に対して安易に求めがちだといった」といったような、向居（2007）でも指摘されている問題はいまだ変わってはいない。だからこそ、受講生自らが、授業内容について具体的にイメージし、近い将来に身を置いているだろう保育現場において、どのように役に立つ可能性があるのかということを考えることは非常に重要である。そして、向居（2007）と同様、本授業では一貫して、将来、保育士や幼稚園教諭といった「せんせい」と呼ばれる職業に就くことを目標としている受講生に対して、教育活動や保育活動というものは現場で働く「せんせい」の創造性の賜物であり、具体的な指導法や現場での問題解決の方法について、「こうすればよい」といった単純なものはないこと、また、心理学の理論や研究知見がそのアイデアの基礎になりうることを強調している。この保育内容の領域「人間関係」は、実施者の専門研究分野ではなく、本学に勤務するまで保育や幼児教育実践には全く関与しなかったことから、より一般的な心理学的理論や研究知見を強調するような授業内容にしたという経緯があることも付記しておく。

高松大学発達科学部2014年度履修ガイド（高松大学，2014）において、本授業は次のように紹介されている。

「本講義では、保育内容－人間関係Ⅰに引き続き、幼稚園教育要領、および、保育所保育指針の基本理念をふまえた上で、子どもの人間関係をどのようにとらえるのか、また指導はどのようにあるべきかについて、人間関係に関するさまざまな心理学的知見をもとに検討します。特に、日々の保育の中で起こりうる子どもの「人とのかかわり」に関する具体的な問題を多くとりあげ、そのような問題に対処する基本的な考え方と対処方法について学びます。」

また、同履修ガイドには、本授業の教育目標として次のように記載されている。

「乳幼児の「人とのかかわり」に関するさまざまな事項を検討・考察することで、人間関係全般に関する基礎的指導力のさらなる育成を目標とします。また、子どもにとっての、人とのかかわりの意味の重要性をあらためて理解し、主観に陥らない子どもと問題のとらえ方を身につけ、指導力の向上を目指します。」

このように、本授業は、保育現場における実践を重要視していることがわかるだろう。実施者も本学に勤務して以来、附属幼稚園や実習園の訪問、学生による子育て支援活動の推進（向居，2012）などを通して、保育・幼児教育実践について大学教員としての立場で多少の経験を積んできたため、それもまた授業内容に反映させようと努めている。

本授業のために使用したテキストは、小田・奥野（2009）であった。このテキストは、「保育内容－人間関係Ⅰ」から引き続き使用されている。授業終了時に、次回の授業内容に該当する教科書の範囲が実施者から示され、受講生はその範囲を予習してくるよう求められる。

また、本授業はパワーポイントのスライドショーを利用して行われる。授業内容にしたがって、補助資料を授業開始時に配布することもあるが、スライド自体をそのまま資料としたものは受講生に直接は配布されない。しかし、授業終了後には、用紙1枚にスライドを6枚掲載したpdfファイル（資料1参照）を学内サーバから入手可能にしており、受講生は、これらを復習に利用するよう指導されている。

本授業では授業開始前に、A4用紙に印刷された「授業アンケート」（資料2参照）を受講生に配布し、毎回授業内容に沿った課題を課す。また、受講生は、授業終了時間の5分

前に「授業アンケート」の「今日の授業の感想」を記入するように求められた。この授業アンケートに記入された感想や質問のうち、実施者が重要だと判断したものについては次の授業でその回答が与えられ、また、提案などの意見はその後の授業全体の改善のための参考とされた。

4. 「保育内容―人間関係Ⅱ」の受講生

本授業の受講生は、発達科学部子ども発達学科3年生(受講登録33名)および4年生(受講登録6名)であった。受講生のほとんどは、幼稚園教諭一種免許状、および、保育士資格の取得を目標としている学生であった。本授業は、幼稚園教諭一種免許状の必修科目、また、保育士資格の選択必修科目になっている(高松大学, 2014)。上述したように、受講生は実施者が担当している「保育内容―人間関係Ⅰ」やその他授業をすでに履修しており、実施者の授業構成や重視する教育目標などについてはある程度理解していると思われる。加えて、保育内容の人間関係領域で扱われる内容は、通常は受講生がすでに履修している発達心理学関連の授業(保育士資格の必修、または、選択必修科目)と重複するものも少なからずあり、心理学の専門用語などの既習事項を確認しながら授業を進行することになる。

5. 「保育内容―人間関係Ⅱ」の授業内容

実施者は、2008年度から本授業を担当している。2009年度に同一出版社の新しいものにテキストを変更したこと(2008年3月の幼稚園教育要領と保育所保育指針の改定のためのテキストの全面改定による)に基づく内容の改変以外には、授業計画に大きな変化はない。基本的な授業内容はテキストを利用して考案されたが、内容によっては、シラバスに参考文献として記載されている文献(例えば、森上・小林・渡辺, 2009; 本郷, 2006など)が用いられた。また、実習等の事情により、シラバス記載の授業計画に変更を加えた。以下、変更後の授業内容と本時までの日程を記した。

第1回「あそびと人間関係」(4月8日)

第2回「あそびと保育者」(4月15日)

第3回「新しいあそびを考えよう」(4月22日)

第4回「新しいあそびをしよう」(4月30日)

第5回「保育者と子どもの人間関係（1）」（5月13日）

第6回「保育者と子どもの人間関係（2）」（5月20日）

第7回「保育者と子どもの人間関係（3）」（5月27日）

第8回「地域に生きる保育者の人間関係」（6月3日）

第9回「長時間の昼間保育の効果」（本時）（6月24日）

第10回「人間関係でちょっと気になる子ども（1）」

第11回「人間関係でちょっと気になる子ども（2）」

第12回「保育所・幼稚園における人間関係」

第13回「保育者同士の人間関係」

第14回「領域「人間関係」の考え方（1）」

第15回「領域「人間関係」の考え方（2）」

6. 研究授業の概要

本時の授業内容は「長時間の昼間保育の効果」であった。本時は、Smith, Nolen-Hoeksema, Fredrickson, & Loftus (2003) の第3章「Psychological Development」にある「Effects of day care」を参考にして構成された。本時の学習目的は、「「保育所に預けること」、つまり、「長時間の昼間保育を行うこと」は子どもにどのような影響があるのかを、研究データをもとに考察すること」、および、「その考察をもとに、「保育の仕事」、および、「保育の質」の重要性に気付いてもらうこと」の2点であった。

以下、本時授業内容を簡単に記す。まず、「保育所に預けること」、つまり、「長時間の昼間保育」は、子どもにどのような影響を与えるのかという疑問を投げかけることから始まった。そして、受講生に課題（本稿第3章参照）を課した。それは、「自分の子どもは保育所に預けたいか、それとも、幼稚園に預けたいか」を問うものであり、あわせて「将来の就労形態や家族形態などを想像しながら、そう考える理由」を求めるものであった。その課題に対する受講生の回答を授業開始後30分まで発表し合い、実施者を介して全体の場で意見交換した。例年の課題の記録から予測された解答パターンは、幼稚園に預ける理由については、「保育所よりも教育重視だから」、「自分が幼稚園に通っていたから」、「2歳までは自分で面倒を見たいから」、「できるだけ長い時間を子どもと一緒に過ごしたいから」というものであった。また、保育所に預ける理由については、「共働きになるだろうから」、「自分が保育所に通っていたから」、「小さいころから保育所に通うほうが集団生活

にうまく適応できそうだから」といったものであった。つまり、学生は、一般的に、これまでの過去経験から、幼稚園に対して「音楽活動や英語活動などを含めた教育活動がしっかりと行われており、小学校への連携がスムーズに行われる」といった『イメージ』を形成しており、幼稚園の選択に対してポジティブな反応を示しているのに対し、保育所に対しては、そのようなイメージはなく、どちらかといえば「共働きなので仕方なく選択する」といった反応が多くみられることが予測された。本年度の受講生においても、例年の受講生と同じ回答傾向がみられた。それらの回答に対し、実施者は、上述したように、既出の意見と異なる点や研究知見と矛盾する点など指摘すべき事柄があればそれを指摘し、受講生間の意見交換を促しながら、受講生自身の課題への回答に対する自己省察が深まるよう試みた。

続いて、実施者が、過去に「保育内容—人間関係Ⅰ」で取り扱った「愛着」に関する研究について説明し、まず、長時間の昼間保育に対する批判やそれを支持する研究知見（例えば、Belsky, 1986; Belsky, Woodworth & Crnic, 1996）を紹介した。その後、このような昼間保育に対する批判を受けて行われたNICHD Early Child Care Research Network (1996, 1997) の大規模研究による知見を紹介し、保育時間ではなく「保育の質」が子どもの満足感や発達に大きな影響を及ぼすことを説明した（「保育の質」に関する研究動向は、秋田・箕輪・高櫻, 2007; 秋田・佐川, 2011などを参照のこと）。そして、受講生が将来保育職に就くにあたって、自らが行うであろう保育の質が子どもたちの将来に大きな影響を与える可能性があり、その保育の質を高めるには受講生自身が「訓練された保育士になること」、つまり、現時点では、「熱心に学業や関連する課外活動に日々取り組むこと」が重要であることに気付いてもらえるように授業内容を構成したつもりである。

本時の雰囲気については、研究授業で学科教員が見学していたということもあり、普段見られるような課題に対する受講生の自由な意見のやり取りが少なかったように感じられた。

7. 研究授業に対する参観者からのコメント

この項では、検討会や授業参観記録において各教員から出された主要な意見を紹介する。コメントの観点については、本学の研究授業で使用されている「授業参観記録」の様式に従っている。

(1) 授業を積極的に評価できる点

①教育内容に関して

- ・最初に、これまでの学習を踏まえて、本時のテーマを「長時間の昼間保育の効果」に定めた理由と目的について、全体の授業計画の中に位置づけて明示したことで、学生たちにとって本授業の方向性がはっきりし、自分たちの学習課題も明確になったと思われる。
- ・長時間の昼間保育の効果について、課題に即した適切な資料を準備し、簡明な説明を行っている。

②授業方法に関して

- ・毎時間、身近な課題を取り上げて、自分の意見を理由を挙げて書かせることで、単なる情緒的で場当たりの意見ではなく、学生の考える力と書く力の両方を鍛えることができている点に感心した。
- ・対話や授業アンケートなどにより、学生自身に考えさせ、課題の存在やそれを解決するための方策などについて、全員が考察できるようにしている。
- ・発表者の考えが甘い場合には、再質問して再思考を促すとともに、発表内容が稚拙な場合は発表者の本意を確認しながら、本時のテーマに沿って要領よくまとめて全員にそれをリピートすることで、自然な形で議論の方向性と深まりを促す工夫をしているところが手慣れていて良かった。
- ・単なる学生の言い放しで終わるのではなく、それを客観的な数字やデータ・グラフで裏付けするとともに、実証的な研究の成果を示して、学生たちの最初の個人的な体験等に基づいた意見と対比させながら、学生たちの関心を次第に本時のテーマのまとめへと導いていった道筋も論理的で良かった。
- ・学生には分かりにくい認知課題や情動課題などを、分かりやすい言葉と具体的な事例で説明したところは学生の理解度を促進する意味で効果的であった。

③その他

- ・力みのない、思考が通常の営みであると感じさせる授業の雰囲気づくりに共感できた。学習への心理的、行動的準備が学生に用意されている。
- ・毎時間、授業アンケートの用紙を用いて、学生の思考力と書く力を養成するとともに、授業の聞き放しで終わるのではなく、授業の感想を書かせて、近年授業で重視さ

れているリフレクション力を高めようとしている点にも学ぶべきところが多い。

- ・授業中、話の間のとり方、笑顔が素晴らしいと感じた。
- ・教職実践演習にも適切だ。

(2) 授業の改善にかかわる点

①授業内容に関して

- ・「思考の乱反射」による発見や深まりを創出する工夫が必要だ。
- ・「保育の質」とは何かについて議論を深めてほしい。
- ・エビデンスは外国のものだが、日本には同様の研究はないのか。あるならば、紹介してほしい。

②授業方法に関して

- ・突っ込んだ議論を誘発する問いかけの工夫が必要ではないか。
- ・今回は、学生の意見発表が個人ごとであったが、グループで議論させる場面があっても良かったのではないか。また、それを全体でシェアするという3段階方式も可能であれば、もう少し学生の意見の深まりや多様性が生まれたのではないかと思う。

③その他

- ・後半早口になった。

(3) 授業全体の感想

- ・受けやすい、受けたくなる授業の雰囲気が醸成されており、教育は人なりという意味における「向居の授業」になっている。
- ・普段から学生との関係は、終始、リラックスした雰囲気の中で授業を進めている様子が感じられた。しかし、後半部のまとめ部分に近くなると、自身（実施者）の体験や研究者としての見解も踏まえて、これから保育士をめざす学生たちに対して、大切なことは何かなどについて力強いメッセージを込めたまとめになっており、学生たちにも印象に残る授業になったものと思われる。
- ・後半、少し早口になり、聞き取りにくいところがあったが、大変勉強になった。

8. まとめ—今後の課題—

本研究授業に対する評価をまとめると、授業内容や授業方法が全体的にポジティブに評

価されていることがわかった。また、それと同時に、議論の深さや質を高めるための工夫が十分ではないことが指摘された。加えて、向居（2007）と同様に、「早口になる話し方」もまた再び問題点として指摘された。これらの点について、実施者は真摯に反省し、可能な限り改善すべきであろう。PowerPointのプレゼンテーションを用いた授業方法については、特に言及されることはなかった。以前に比べて、同ソフトウェアを用いて授業が行われることが多くなったためだと推測される。

本研究授業は、実施者にとって、客観的に授業を見直すために大変よい機会だったと考える。前回の研究授業（向居，2007）からすでに7年以上経っており、以前と比較して授業の準備を含む学内業務のすべてが習慣化し、自らの教授活動に対しても内省することが少なくなった。そのため、研究授業を実施することにより、初心に帰るような気持ちで授業を見直すことができた。本授業だけではなく、実施者が担当するすべての授業に対して共通する有用な示唆を得ることができたと考える。上述したように、本学の研究授業は、「啓発型」、「モデル伝達型」、「反省（リフレクション）型」のそれぞれの機能が混在したものであるが、田口他（2003）が指摘する反省（リフレクション）型の問題点である「過度な反省による精神的疲弊」を十分に意考慮したうえで、日常の学内業務に支障が出ない範囲ならば、研究授業をより頻繁に実施することは教員の利益にもなり、より良いFDに貢献するだろう。

実施者に関しては、前回の研究授業でも指摘された「早口の話し方」について改善が見られなかったことは、大いに反省すべきである。豊田（2009）は、授業における教師の技術として、話し方（速さ、間のとり方、音量、抑揚、話の内容）の重要性を論じている。実施者が指摘された「速さ」では、テレビのアナウンサーが1分間に280から300音の速さで発話していることが目安にされており、難しい学習内容を説明するときには、そのスピードを遅くする必要があることが述べられている。本授業では、授業中の実施者と受講生、および、受講生同士のコミュニケーションを重要視するために、計画通りの時間配分で授業が進行しないこともあるが、その点に十分留意し、ゆっくりとわかりやすく話すことで受講生の理解を促進することが必要となるだろう。

最後に、研究授業に協力いただいた受講生、ならびに、諸先生方に心からお礼を申し上げます。

引用文献

- 秋田喜代美・箕輪潤子・高櫻綾子 (2007). 保育の質研究の展望と課題 東京大学大学院教育学研究科紀要, 47, 256-272.
- 秋田喜代美・佐川早季子 (2011). 保育の質に関する縦断研究の展望 東京大学大学院教育学研究科紀要, 51, 217-234.
- Belsky, J. (1986). Infant day care: A cause for concern? *Zero to Three*, 7, 1-7.
- Belsky, J., Woodworth, S., & Crnic, K. (1996). Trouble in the second year: Three questions about family interactions. *Child Development*, 60, 649-662.
- 本郷一夫 (2006)「保育の場における『気になる』子どもの理解と対応」 ブレーン出版
- 森上史朗・小林紀子・渡辺英則 (2009)「保育内容 人間関係」 ミネルヴァ書房
- 向居暁 (2007). 研究授業「教育心理学」の実施 高松大学紀要, 49, 249-260.
- 向居暁 (2012). 地域貢献・子育て支援イベント「げんき村 3丁目わんぱく通り」の企画・運営を通じた社会人基礎力の育成 研究紀要 (高松大学・高松短期大学), 56・57, 193-212.
- NICHD Early Child Care Research Network (1996). Characteristics of infant child care: Factors contributing to positive caregiving. *Early Childhood Research Quarterly*, 11, 296-307.
- NICHD Early Child Care Research Network (1997). Familial factors associated with the characteristics of nonmaternal care for infants. *Journal of Marriage and the Family*, 59, 389-408.
- 小田豊・奥野正義 (2009).「新保育ライブラリー 保育内容 人間関係」 北大路書房
- Smith, E. E., Nolen-Hoeksema, S., Fredrickson, B. L., & Loftus, G. R. (2003). *Atkinson & Hilgard's Introduction to psychology*. 14th ed. Belmont, CA: Wadsworth/Thomson Learning.
- 田口真奈・藤田志穂・神藤貴昭・溝上慎一 (2003). FDとして公開授業の類型化—13大学の事例をもとに— 日本教育工学会論文誌, 27 (Suppl.), 25-28.
- 高松大学 (2014).「2014履修ガイド (履修の手引き・シラバス) 発達科学部」 高松大学
- 田代和美 (2009). 演習1学習の前に：オリエンテーション 田代和美・松村正幸 編著「演習保育内容 人間関係」 建帛社, pp. 1-2.
- 豊田弘司 編著 (2009). 改訂版・教育心理学—心理学による教育方法の充実— 小林出版

保育内容 - 人間関係Ⅱ

第七回 長時間の昼間保育の効果

課題

- ここにいる多くの皆さんが幼児教育に関わることになると思います。
- そこで質問です。
- 自分の子どもは「保育所」に預けたいですか。それとも、「幼稚園」に預けたいですか。そう考える理由も書いてください。
- 将来の仕事の事情や家族の形態などを想像しながら記述してください。

保育所待機児童数と保育所利用率の推移(H25年)

年	待機児童数(人)	利用率(%)
1998	15,794	25.5%
1999	17,976	27.3%
2000	18,340	27.8%
2001	21,080	27.1%
2002	25,384	27.6%
2003	26,275	27.6%
2004	26,205	27.6%
2005	27,315	27.6%
2006	28,825	27.6%
2007	27,745	27.6%
2008	27,745	27.6%
2009	27,745	27.6%
2010	27,745	27.6%
2011	27,745	27.6%
2012	27,745	27.6%
2013	27,745	27.6%
2014	27,745	27.6%
2015	27,745	27.6%
2016	27,745	27.6%
2017	27,745	27.6%
2018	27,745	27.6%
2019	27,745	27.6%
2020	27,745	27.6%
2021	27,745	27.6%
2022	27,745	27.6%
2023	27,745	27.6%
2024	27,745	27.6%
2025	27,745	27.6%

乳幼児期の人間関係の特徴(復習)

- 愛着**
 - ある人と、他の特定の人と間に形成される情緒的な絆のことであり、他の特定の人と情緒的に結びつきたいという欲求をもつ状態
 - 乳児期の主な愛着の対象は「母親」
 - 子どもは母親との相互作用を通して、自分の行動と母親を結びつけるようになる。

⇒しかし、保育所に入る、つまり、長時間の昼間保育を行うと母親と長い時間を過ごせないが、大丈夫なのか？

講義のテーマ

- 保育所に預けること(つまり、長時間の昼間保育)って子どもにどんな影響があるのか？

保育所と入所児童数(H25年)

年	保育所数(施設数)	入所児童数(人)
1998	2,000	2,000,000
1999	2,000	2,000,000
2000	2,000	2,000,000
2001	2,000	2,000,000
2002	2,000	2,000,000
2003	2,000	2,000,000
2004	2,000	2,000,000
2005	2,000	2,000,000
2006	2,000	2,000,000
2007	2,000	2,000,000
2008	2,000	2,000,000
2009	2,000	2,000,000
2010	2,000	2,000,000
2011	2,000	2,000,000
2012	2,000	2,000,000
2013	2,000	2,000,000
2014	2,000	2,000,000
2015	2,000	2,000,000
2016	2,000	2,000,000
2017	2,000	2,000,000
2018	2,000	2,000,000
2019	2,000	2,000,000
2020	2,000	2,000,000
2021	2,000	2,000,000
2022	2,000	2,000,000
2023	2,000	2,000,000
2024	2,000	2,000,000
2025	2,000	2,000,000

全国待機児童数マップ

実は、待機児童数の約63%が関東圏

地域	待機児童数(人)
関東圏	1,000,000
中部圏	500,000
近畿圏	300,000
中国圏	200,000
四国圏	100,000
北海道圏	50,000
東北圏	50,000
北陸圏	50,000
山陽圏	50,000
九州圏	50,000

愛着研究の発展の結果

- 早期の愛着体験は子どもの発達において重要だということを示す研究
 - ハーロウのアカゲザルの研究
 - ボウルビイの研究(母性剥奪・マターナル・デプリベーション)
 - エインズワースの研究(ストレンジ・シチュエーション法)

⇒長時間の昼間保育が子どもの長年にわたる精神生活に与える影響を疑問視

昼間保育に対する批判

- ベルスキィ(1986, 1996)
 - 1週間に20時間以上、実の母親以外から保育を受けた幼児は・・・
 - ストレンジ・シチュエーション課題で、不安定として分類されることが多い
 - 大人の要求に対し従順ではない
 - 同年齢の子どもに対して攻撃的になることが多い
- ⇒長時間の昼間保育が子どもの発達に否定的な影響を及ぼすことを示唆

アメリカにおける大規模な研究

- NICHD (National Institute of Child Health and Development) Early Child Care Research Network (1996, 1997)による研究
 - アメリカの10の地域で「子どもの家族特性」ならびに「子どもたちが受けた保育の質」に関するデータを収集
- 結果
 - 1週間に30時間以上昼間保育で過ごした子どもは、10時間未満の子どもと大きな違いはなかった。
 - しかし、保育の質は子どもの満足感、ならびに、発達に大きな影響を及ぼすことがわかった。

保育の質

- 質的に低い保育所
 - 多くの子どもに対して保育士はひとり
 - 保育士の訓練は不十分
 - 保育士の入れ替わりが激しい
- ⇒このような施設で多くの時間を過ごした子どもは、少ない時間しか過ごさなかった子どもたち、もしくは、質の高い施設で過ごした子どもたちに比べて、多くの認知課題ならびに情動を見る課題において成績が悪かった。
- 調査対象(アメリカ)の約半数が質の低い施設！

保育の質の重要性

- 早期の年齢で質の高い昼間保育を受けた子どもたちは、それより遅い時期に入った子どもたちよりも・・・
 - 小学校に上がると高い社会性を示す (Andersson, 1992; Field, 1991; Howes, 1990)
 - よりよく自己を主張できるようになる (Scarr & Eisenberg, 1993)
 - 高ストレスの家庭生活で養育される影響を減ずる (Phillips, et al, 1994)
- ⇒子どもに対する保育士の比率が高く、設備が整っている保育所が重要！

保育所(長時間の昼間保育)の影響のまとめ

- 質的に並以上の保育所
 - 望ましくない影響(あえてあげれば)
 - ⇒情緒的な発達(感情表現など)に現れる傾向
 - 望ましい影響
 - ⇒社会性の発達(友人関係など)に現れる傾向
 - 認知的な発達(学業など)に関しては、一般的に望ましい影響を受けるか、あまり影響を受けないかのいずれか
- 質的に低い保育所
 - 子どもたちの家庭環境にかかわらず、負の影響

[illegible]

執 筆 者 紹 介

O.Baterdene	モンゴル国経済開発省投資政策局	主 任
丸 山 豊史	高 松 大 学 経 営 学 部	教 授
山 口 直木	高 松 大 学 経 営 学 部	准 教 授
岡 本 丈彦	高 松 大 学 経 営 学 部	助 教 授
澤 田 文男	高 松 大 学 発 達 科 学 部	准 教 授
津 村 怜花	高 松 大 学 経 営 学 部	准 教 授
花 城 清紀	高 松 大 学 経 営 学 部	助 教 授
藤 井 明 日 香	高 松 大 学 発 達 科 学 部	講 師
岡 耕 平	滋 慶 医 療 科 学 大 学 院 大 学	講 師
川 崎 紘 宗	高 松 大 学 経 営 学 部	講 師
竹 内 由 佳	高 松 大 学 経 営 学 部	助 教 授
向 居 暁	高 松 大 学 発 達 科 学 部	准 教 授
森 享 子	高 松 大 学 経 営 学 部	非 常 勤 講 師
井 上 範 子	高 松 短 期 大 学	教 授
小 西 博 子	高 松 短 期 大 学	准 教 授
藤 井 雄 三	高 松 短 期 大 学	講 師
溝 渕 利 博	高 松 大 学 発 達 科 学 部	准 教 授

研 究 紀 要

第62・63合併号

平成27年 2 月25日 印刷

平成27年 2 月28日 発行

編集発行

高 松 大 学

高 松 短 期 大 学

〒761-0194 高松市春日町960番地

TEL (087) 841-3255

FAX (087) 844-4759

印 刷

株式会社 美巧社

高松市多賀町 1 - 8 - 10

TEL (087) 833-5811